



## 一つの事を貫く (下)

### 引退後帰郷も考えた

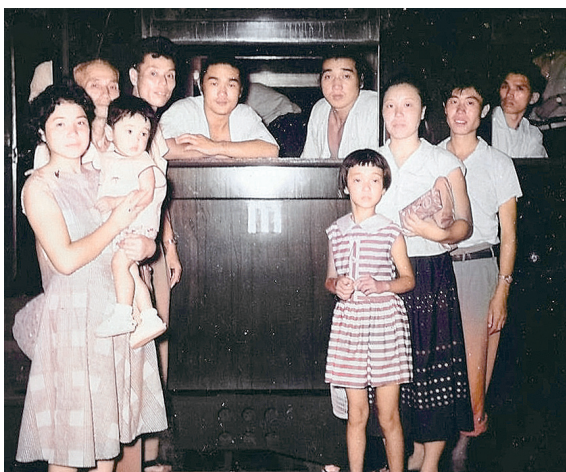
柏戸は横綱昇進後も自らの将来はのん気に構えていた。力士引退後の青写真など確たるものは持ち合わせていなかった。業を煮やしたのが伊勢ノ海親方だった。

柏戸時代の主人公の引退後が中ぶらりんでは師匠の面目が立たない。3歳上の長兄・勝が呼び出され、上京した。

「お兄さん、富樫(柏戸)は年寄株も取得しようとしてない。このままでは廃業ですよ。家族内でもしっかりと指導してください」。その厳しい口調に兄は「結構ですよ。引退したら、山形で私が面倒見ます。一緒に農

業をやりますよ」と切り返した。

柏戸はこのやり取りを弟子・藤ノ川から聞き「兄貴、やめた後オレの面倒見てください。気持ちがいいよ。でも大丈夫だよ。設の意思は少なかつたのだ。



### 独立意思も低かつた

その後結婚し、年寄株(鏡山名跡)も取得した。都内江戸川区北小岩に購入した一戸建て用の土地は「子供たちを遊ばせたい」と庭を広々と取った。相撲部屋創設の意思は少なかつたのだ。

結局は後援筋の援助もあつて、鏡山部屋を立ち上げる

ひとときの帰郷だったが鶴岡駅から列車が出る。車内の柏森(中央左)と新進閣取の柏戸を囲むように家族らが見送った

引退した時は退職金も出さずらしいし、親方にならなくても何とかなるよ」と答えた。その顔つきのいく分かは、引退後の帰郷アイデアにまんざらでもなさそうな表情があつたという。

### 15年間の人工透析

引退後、18年間務めた審判部時代、持病の糖尿病が腎不全を引き起こし、人工透析をすることになった。

これは亡くなるまで15年間続いた。週3回、1日おきに6時間。本場所中は午後6時の打ち出し後出向き、帰宅は深夜零時を回つたが「2日に一度、健康チェックをしてもらっているようなもの。逆に安心だよ」と気丈だった。好きな酒も断つていたし、ストレスのかかる日々だったが、醸し出す明るい雰囲気、病状を周囲に感じさせなかつた。

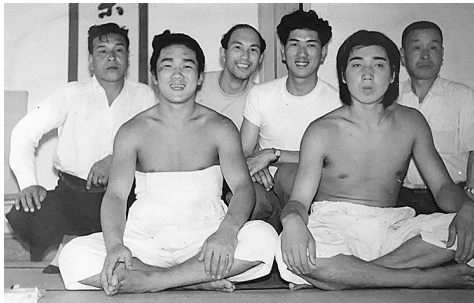
しかし糖尿病による合併症から視力が衰え、両足甲が腫れ、骨ももろくなるなど、物言いの協議で土俵に上がるのも次第につらくなつた。それでも審判長を眼光鋭く貫くことに努めた晩

年だった。

相撲協会理事及び審判部長を退いた2年後、平成8(1996)年12月8日、58歳で帰らぬ人となった。多臓器不全が死因となった。相撲界では横綱経験者の還暦土俵入りが慣例となつている。赤い綱を締め、国技館の土俵で披露する。「足が痛くて土俵入りはできなくて、60歳までは生き抜いてほしい」。家族らは願つたが、かなわなかつた。

### 良い出会いに恵まれ

母は角界入りに反対し、公務員など堅実な仕事を歩



ませたかつた。柏戸自身も進んで力士になりたかつたわけではない。それでも恵まれた体格と運動能力の確かさが厳しい力士修業においてスピード出世の原動力となつた。

こうした中、局面局面で幸せな出会いがあつた。例えば弟子入り直後は同じ部屋(鶴岡市上郷地区出身)の先輩、5歳上の柏森(弭間幸雄)の存在があつた。おっとり然とした

弟を守ってくれる存在で、その後番付が逆転した後も、「慕い・慕われ」の関係は不変だった。柏戸の飾り気のない性格は物事が全て番付に集約される大相撲に合っていた。つらいことがあつても一心不乱に稽古に打ち込むことで素質が生かされ、地位を上げ、横綱として結実した。

髪も伸びて入門翌年(昭和30年)に帰郷。当時も柏森の家族・知り合いが2人の激励の場を設けた

1年間にわたつた連載は終了となる。柏戸に関わつた人たちにもそれぞれ興味深い人生・物語があつた。書き切れなかつたことやこぼれたものはまた別の機会に触れることがありそうだ。

敬称略

富樫 嘉美

### 北の富士79歳最高齢

○：生存している歴代横綱中、最長寿はNHK相撲解説者の北の富士で79歳。今年1月82歳で亡くなつた

栃ノ海を「長生きの目標にしたい」と常々語つていたが、自分自身が最高齢になつた。「栃若時代」の栃錦64歳、若乃花82歳と両者はともに還暦土俵入りを行えた後亡くなつた。若乃花は長生きだった。大鵬は享年72歳。同世代では佐田の山79歳、琴桜66歳。次世代では輪島70歳、北の湖62歳。また双葉山56歳、千代の富士61歳など。